

温泉だより

芥川龍之介

青空文庫

……わたしはこの温泉宿やどにもう一月ひとつきばかり滞在たいざいしています。
 が、肝腎かんじんの「風景」はまだ一枚も仕上げしあません。まず湯にはい
 ったり、講談本を読んだり、狭い町を散歩したり、——そんなこ
 とを繰り返して暮らしているのです。我ながらだらしのないのに
 は呆あきれますが。（作者註。この間に桜あいだの散っていること、鶴せき鴿れい
 の屋根へ来ること、射しやてき的に七円五十銭使ったこと、田舎芸者いなかげいしや
 のこと、安来節やすきぶし芝居しばに驚いたこと、蕨わらびが狩りに行ったこと、消
 防の演習を見たこと、墓かまぐち口を落したことなどを記しるせる十数行じゅうしゅうぎょう
 あり。）それから次手ついでに小説じみた事実談を一つ報告しやうこくしましょう。
 もっともわたしは素人しろうとですから、小説になるかどうかはわかり

ません。ただこの話を聞いた時にちょうど小説か何か読んだような心もちになつたと言うだけのことです。どうかそのつもりで読んで下さい。

なん何でも明治三十年代に はぎのはんのじょう萩野半之丞だいくと言う大工が一人、この町

の山寄りに住んでいました。萩野半之丞と言う名前だけ聞けば、

いかなる やさおとこ優男かと思うかも知れません。しかし身の丈六尺五

寸、体重三十七貫と言うのですから、太刀山たちやまにも負けない大男だ

つたのです。いや、恐らくは太刀山も いっちゅう一籌ゆうを輸するくらいだ

つたのでしよう。現に同じ宿やどの客の一人、——「な」の字さんと

言う（これは国木田独歩くにきだどつぽの使つた国粹こくすい的省略法に従つたのです

。薬種問屋やくしゆどいの若主人は子供心にも大砲おおづつよりは大きいと思つ

たと言うことです。同時にまた顔は稲川いながわにそっくりだと思つたと
 と言うことです。

半之丞は誰に聞いて見ても、極人ごくじんの好い男だつた上に腕も相当
 にあつたと言うことです。けれども半之丞に関する話はどれも多
 少可笑おかしいところを見ると、あるいはあらゆる大男並なみに総身そうみに智
 慧えが廻り兼ねおもむきと言う趣おもむきがあつたのかも知れません。ちよつと本筋
 へはいる前にその一例を挙げておきましょう。わたしの宿の主人
 の話によれば、いつか夙こがらしはげの烈しい午後こにこの温泉町を五十戸こばか
 り焼いた地方的大火のあつた時のことです。半之丞はちようど一
 里ばかり離れた「か」の字村のある家へ建たてまえ前まえか何かに行つてい
 ました。が、この町が火事だと聞くが早いか、尻はしよを端折たまる間も惜

しいように「お」の字街道かいどうへ飛び出したそうです。するとある農家の前に栗毛くりげの馬が一匹つな繋いである。それを見た半之丞あとは後あとで断ことわれば好いいいとも思おもったのでしよう。いきなりその馬またがに跨またがつて遮し二無二街道やにむにを走り出しました。そこまでは勇ましかつたのに違ちがいありません。しかし馬は走り出したと思うと、たちまち麦畑あぶらへ飛とびこみました。それから麦畑あぶらをぐるぐる廻まわる、鍵かぎの手に大根だいこん畑けを走り抜ける、蜜柑山みかんやまをまっ直すぐに駈かけ下おりる、——とうとううしまいには芋いもの穴の中へ大男の半之丞を振り落したまま、どこかへ行いつてしまいました。こう言う災難あに遇あつたのですから、勿論もちろん火事などには間まに合あいません。のみならず半之丞は傷だらけになり、這はうようにこの町へ帰かえつて来きました。何なんでも後あとで聞きいて見

れば、それは誰も手のつけられぬ盲馬めくらうまだつたと言うことです。

ちようどこの大火のあつた時から二三年後ごになるでしょう、

「お」の字町の「た」の字病院へ半之丞の体を買つたのは。しか

し体を買つたと云つても、何も昔風に一いっし生奉公しょうほうこうの約束をした

訣わけではありません。ただ何年かたつて死んだ後のち、死体の解剖かいぼうを

許す代りに五百円の金を貰もらつたのです。いや、五百円の金を貰つ

たのではない、二百円は死後に受けとることにし、差し当りは契け

約書いやくしょと引き換えに三百円だけ貰つたのです。ではその死後に受

けとる二百円は一体誰の手へ渡るのかと言うと、何でも契約書なんの

文面によれば、「遺族または本人の指定したるもの」に支払うこ

とになっていました。実際またそうでもしなければ、残金二百円

うんぬん云々は空文くうぶんに了るおわるほかはなかつたのでしよう、何しろ半之丞は妻子は勿論、親戚ひとりさえ一人もなかつたのですから。

当時の三百円は大金たいきんだつたでしょう。少くとも田舎いなか大工の半之丞には大金だつたのに違いありません。半之丞はこの金を握るが早いか、腕時計うでどけいを買つたり、背広せびろを拵こしらへたり、「青ペン」のお松まつと「お」の字町へ行つたり、たちまち豪奢ごうしゃを極きめ出しました。「青ペン」と言うのは亜鉛とたん屋根に青ペンキを塗ぬつた達磨茶屋だるまぢやです。当時は今ほど東京風にならず、軒のきには糸瓜へちまなども下つていたそうですから、女も皆田舎いなかじみていたことでしょう。が、お松は「青ペン」でもとにかく第一の美人になつていました。もつともどのくらいの美人だつたか、それはわたしにはわかりません。

ただ鮎屋すしやに鰻屋うなぎやを兼ねた「お」の字亭のお上かみの話によれば、色の浅黒い、髪かみの毛けの縮ちぢれた、小がらな女おんなだったと言うことです。

わたしはこの婆おばさんにいろいろの話はなしを聞きかせて貰もらいました。就な

かんずく

中なか 妙たぎに気きの毒どくだったのはいつも蜜柑みかんを食たっていなければ手紙

一本書いっぴんけぬと言う蜜柑中毒みかんちゆうどくの客きやくの話はなしです。しかしこれはまたいつか報告ほうこくする機会きかいを待つことにしましょう。ただ半之丞はんしちゆうの夢中むちゆうになつていたお松おまつの猫殺ねころしの話はなしだけはつけ加くえておかなければなりません。お松おまつは何なにでも「三太さんた」と云いう鳥からすねこ猫ねこを飼かっていました。ある日あるひその「三太さんた」が「青ペン」のお上かみの一張羅いっちやうらの上うへへ粗忽そそつをしたのです。ところが「青ペン」のお上かみと言うのは元来猫ねこが嫌きらいだったものですから、苦情くせいを言うの言いわないのではありません。

しまいには飼い主のお松にさえ、さんざん悪態あくたいをついたそうです。するとお松は何も言わずに「三太」を懐ふところに入れたまま、「か」の字川の「き」の字橋へ行き、青あおと澱よどんだ淵ふちの中へ烏猫を抛ほうりこんでしまいました。それから、——それから先は誇張かも知れません。が、とにかく婆さんの話によれば、発頭人ほつとうにんのお上は勿論「青ペン」じゆう中の女の顔を蚯蚓腫れみみずばだらけにしたと言うことです。

半之丞の豪奢きわを極めたのは精々せいせいひとつき一月か半月はんつきだったでしょう。何しろ背広は着て歩いていても、靴くつの出来上つて来た時にはもうその代だいも払えなかつたそうです。下しもの話もほんとうかどうか、それはわたしには保証出来ません。しかしわたしの髪を刈りに出

かける「ふ」の字軒の主人の話によれば、靴屋は半之丞の前に靴を並べ、「では棟梁とうりよう、元値もとねに買っておくんなさい。これが誰にでも穿ける靴ならば、わたしもこんなことを言いたくはありません。が、棟梁、お前まえさんの靴は仁王様におうさまの草鞋わらじも同じなんだから」と頭を下さげて頼んだと言うことです。けれども勿論半之丞は元値にも買うことは、出来なかつたのでしよう。この町の人々には誰に聞いて見ても、半之丞の靴をはいているのは一度も見かけなかつたと言っていますから。

けれども半之丞は靴屋の払いに不自由したばかりではありません。それから一月とたたないうちに今度はせつかくの腕時計や背広までも売るようになって来ました。ではその金はどうしたかと

言え、前後の分別ぶんべつも何もなしにお松につきこんでしまったのです。が、お松も半之丞に使わせていたばかりではありません。やはり「お」の字のお上かみの話によれば、元来この町の達磨茶屋だるまぢやの女は年々夷えびすこう講の晩になると、客をとらずに内輪うちわばかりで三味線せんを弾ひいたり踊まったりする、その割り前まえの算段さんだんさえ一時はお松には苦しかったそうです。しかし半之丞もお松にはよほど夢中まうちゆうになっていたのでしょう。何しろお松は癩かんしゃく癩しゃくを起すと、半之丞むなの胸むなぐらをとって引きずり倒し、麦酒ビール罎びんで擲なぐりなどしたものです。けれども半之丞はどう言う目に遇あつても、たいていは却かえつて機嫌きげんをとつていました。もつとも前後にたつた一度、お松がある別荘番せがれの倅せがれと「お」の字町へ行つたとか聞いた時には別人の

ように怒おこったそうです。これもあるいは幾分か誇張があるかも知れません。けれども婆ばあさんの話したままを書けば、半之丞は（作者註。田園でんえん的嫉妬てきしつとの表白としてさもあらんとは思われるれども、この間あいだに割愛せざるべからざる数すうぎ行ぎょうあり）と言うことです。

前に書いた「な」の字さんの知っているのはちようどこの頃の半之丞でしょう。当時まだ小学校の生徒だった「な」の字さんは半之丞と一しよに釣かよに行ったり、「み」の字峠とうげへ登ったりしました。勿論半之丞がお松かよに通いつめていたり、金に困っていたりしたことは全然「な」の字さんにはわからなかったのでしょうか。

「な」の字さんの話は本筋にはいずれも関係はありません。ただちよつと面白かったことには「な」の字さんは東京へ帰のちった後、

差出し人 はぎのはんのじょう 萩野半之丞の小包みを一つ受け取りました。嵩 かさ は半紙の一しめくらいある、が、目かたは莫迦 ぼか に軽い、何かと思つてあけて見ると、「朝日」の二十入りの空き箱 あ に水を打つたらしい青草がつまり、それへ首筋の赤い蛍 ほたる が何匹もすがつていたと言うことです。もつともそのまた「朝日」の空き箱には空気を通わせるつもりだったと見え、べた一面に錐 きり の穴をあけてあつたと云うのですから、やはり半之丞らしいには違いないのですが。

「な」の字さんは翌 よくとし 年の夏にも半之丞と遊ぶことを考えていたそうです。が、それは不幸にもすつかり当 あて が外 はず れてしまいました。と言うのはその秋の彼岸 ひがん の中 ちゆうにち 日、萩野半之丞は「青ペン」のお松に一通の遺書 いしよ を残したまま、突然風 ふう 変 がわ りの自殺をしたので

す。ではまたなぜ自殺をしたかと言えば、——この説明はわたしの報告よりもお松宛あての遺書に譲ることにしましょう。もつともわたしの写したのは実物の遺書ではありません。しかしわたしの宿の主人が切抜帖きりぬきちように貼はつておいた当時の新聞に載つていたものですから、大体間違いはあるまいと思います。

「わたくし儀ぎ、金がなければお前様まえさまとも夫婦になれず、お前様の腹の子の始末しまつも出来ず、うき世がいやになり候そうろうあいだ間、死んでしまいます。わたくしの死がいは「た」の字病院へ送り、（向うからとりに来てもらつてもよろしく御座候ござ。）このけい約書とひきかえに二百円おもらい下され度たく、その金で「あ」の字の旦那だんな「これはわたしの宿の主人です。」のお金を使いこんだだけはま

どう「償つぐのう？」ように頼み入り候。「あ」の字の旦那にはまことに、まことに面めんぼく目ありません。のこりの金はみなお前様のものにして下され。一人旅うき世をあとに半之丞。「これは辞じせい世でしょう。」おまつどの。」

半之丞の自殺を意外いがいに思ったのは「な」の字さんばかりではありません。この町の人々もそんなことは夢にも考えなかつたと言うことです。若し少しでもその前に前ぜんちよう兆らしいことがあつたとすれば、それはこう言う話だけでしよう。何でも彼岸前なんのある暮れがた、「ふ」の字軒の主人は半之丞と店の前の縁えんだい台に話していました。そこへふと通りかかったのは「青ペン」の女の一人です。その女は二人の顔を見るなり、今しがた「ふ」の字軒の屋

根の上を火の玉が飛んで行つたと言いました。すると半之丞はおまじめ真面目に「あれは今おらが口から出て行つただ」と言つたそうです。自殺と言うことはこの時にもう半之丞の肚はらにあつたのかも知れません。しかし勿論もちろん「青ペン」の女は笑つて通り過ぎたと言ふことです。「ふ」の字軒の主人も、——いや、「ふ」の字軒の主人は笑ううちにも「縁起えんぎでもねえ」と思つたと言つていました。それから幾日もたたないうちに半之丞は急に自殺したのです。そのまた自殺も首を縊くつたとか、喉のどを突いたとか言うのではあります。 「か」の字川の瀬の中に板いた囲がこいをした、「独とっこ銛この湯」と言う共同風呂がある、その温泉の石槽いしぶねの中にまる一晚沈んでいた揚句あげく、心臓麻痺しんぞうまひを起して死んだのです。やはり「ふ」の字軒

の主人の話によれば、隣となりの煙草屋の上かみさんが一人、当夜かれこれ十二時頃に共同風呂へはいりに行きました。この煙草屋の上さんは血の道か何かだったものですから、宵のうちにもそこへ来ていたのです。半之丞はその時も温泉の中に大きな体を沈めていました。が、今もまだはいっている、これにはふだんまつびるま昼間でも湯ゆ巻まき一つになつたまま、川の中の石いしづた伝たいに風呂へ這はつて来る女じよじ丈夫ようぶもさすがに驚いたと言うことです。のみならず半之丞は上さんの言葉にうんだともつぶれたとも返事をしない、ただ薄暗い湯気ゆげの中にまつ赤になつた顔だけ露あらわしている、それも瞬またたき一つせずじつと屋根裏の電燈を眺めていたと言うのですから、無気ぶき味みだったのに違いありません。上さんはそのために長湯ながゆも出来ず、

そうそう

々風呂を出てしまったそうです。

共同風呂のまん中には「独鈷とっこの湯」の名前を生じた、大きい石の独鈷があります。半之丞はこの独鈷の前にちやんと着物を袖そでだたみにし、遺書は側そばの下駄げたの鼻緒はなおに括くくりつけてあったと言うことです。何しろ死体は裸のまま、温泉の中に浮いていたのですから、若しその遺書でもなかったとすれば、恐らくは自殺かどうかさえわからずにしまったことでしょう。わたしの宿の主人の話によれば、半之丞がこう言う死にかたをしたのは苟いくも「た」の字病院へ売り渡した以上、解剖かいぼう用の体に傷をつけてはすまないと思つたからに違ちがひないそうです。もつともこれがあの町の定説と云う訣わけではありません。口の悪い「ふ」の字軒の主人などは、「何、

すむやすまねえじゃねえ。あれは体に傷をつけては二百両りょうにならねえと思つたんです。」と大いに異説を唱となえていました。

半之丞の話はそれだけです。しかしわたしは昨日きのうの午後、わたしの宿の主人や「な」の字さんと狭苦しい町を散歩する次手ついでに半之丞の話をしましたから、そのことをちよつとつけ加えましょう。もつともこの話に興味を持っていたのはわたしよりむしろ「な」の字さんです。「な」の字さんはカメラをぶら下げたまま、老ろう眼鏡んきょうをかけた宿の主人に熱心にこんなことを尋ねていました。

「じゃそのお松まつと言う女はどうしたんです？」

「お松ですか？ お松は半之丞の子を生んでから、……」

「しかしお松の生んだ子はほんとうに半之丞の子だったんですか

？」

「やっぱり半之丞の子だったですな。瓜うり二つと言つても好よかったですから。」

「そうしてそのお松と言う女は？」

「お松は「い」の字と言う酒屋に嫁よめに行つたです。」

熱心になっていた「な」の字さんは多少失望したらしい顔をした。

「半之丞の子は？」

「連れっ子をして行つたです。その子供がまたチブスになって、……」

「死んだんですか？」

「いいや、子供は助かった代りに看^{かんびよう}病^{びよう}したお松が患^{わずら}いついたです。もう死んで十年になるですが、……」

「やっぱりチブスで？」

「チブスじゃないです。医者は何とか言っていたのですが、まあ看病^{びんぱん}疲れですな。」

ちようどその時我々は郵便局の前に出ていました。小さい日^{にほん}本建^{だて}の郵便局の前には若^{わか}楓^{かえで}が枝^{えだ}を伸ば^のしています。その枝^{えだ}に半ば遮^{さえぎ}られた、埃^{ほこり}だらけの硝子窓^{がらす}の中にはずんぐりした小倉^{こくらふ}服^くの青年が一人、事務^とを執^とっているのが見えました。

「あれですよ。半之丞の子と言うのは。」

「な」の字^なさんもわたしも足を止めながら、思わず窓の中を覗^{のぞ}き

こみました。その青年が片頬かたほおに手をやったなり、ペンが何かを動かしている姿は妙に我々には嬉しかったのです。しかしどうも世の中はうっかり感心も出来ません、二三歩先に立った宿の主人は眼鏡めがね越しに我々を振り返ると、いつか薄笑いを浮かべているのです。

「あいつももう仕かたがないのですよ。『青ペン』通いばかりしているのですから。」

我々はそれから「き」の字橋まで口をきかずに歩いて行きました。……

(大正十四年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：大野晋

1999年1月17日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

温泉だより

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>